

【第1部】基礎編 (Q1～Q20)

Q1. 答え：尊敬語（二重敬語）

解説：「せたまふ」＝帝に対する尊敬。「お書きになる」。

Q2. 答え：謙譲語

解説：「奉る」＝差し上げる。お手紙を差し上げる相手を敬う。

Q3. 答え：謙譲語

解説：「申す」＝「言ふ」の謙譲語（申し上げる）。動作の受け手である、申し上げる相手（高貴な人）を敬う。

Q4. 答え：丁寧語

解説：「侍り」は「参り」に付く丁寧の補助動詞（～ます）。「私も参ります」。話し相手を敬う。

Q5. 答え：尊敬語

解説：「御覧ず」＝ご覧になる。中宮に対する尊敬。

Q6. 答え：謙譲語

解説：「参る」＝行くの謙譲。御所を敬う。

Q7. 答え：尊敬語

解説：「おはす」＝「あり・をり」の尊敬語（いらっしゃる）。「法皇が御堂にいらっしゃる」。法皇を敬う。

Q8. 答え：謙譲語

解説：「仕うまつる」＝お仕えする。君を敬う。

Q9. 答え：丁寧語

解説：「侍り」＝ございます。

Q10. 答え：尊敬語

解説：「仰す」＝おっしゃる。上を敬う。

Q11. 答え：謙譲語

解説：「候ふ」はここでは本動詞。「御前に（貴人のおそばに）」とあるので「お控え申し上げる・お仕えする」意の謙譲語で、御前の主（貴人）を敬う。補助動詞（～ます）や、物が「あります」の意なら丁寧語。

Q12. 答え：尊敬語（二重敬語）

解説：「苦しま」（未然形）＋「せ」（尊敬の助動詞「す」連用形）＋「たまふ」（尊敬の補助動詞）。「せたまふ」の二重敬語（最高敬語）で帝を敬う。

Q13. 答え：謙譲語

解説：「まうづ（参づ）」＝「行く・来」の謙譲語。「御前」（高貴な方の御前）に参上する意。動作の向かう先である高貴な方を敬う。

Q14. 答え：尊敬語

解説：「大殿籠る」＝お休みになる。院を敬う。

Q15. 答え：謙譲語（下二段「給ふ」の連体形）

解説：「たまふる」は係助詞「なむ」の結びで連体形。四段の「給ふ」なら連体形は「たまふ」なので、「たまふる」は下二段。下二段の「給ふ」は、会話文で話し手自身の「思ふ」などに付く謙譲の補助動詞（～ております）で、聞き手を敬う。「そのように思っております」と申し上げる。

Q16. 答え：丁寧語

解説：「候ふ」は「参り」に付く丁寧の補助動詞（～ます）。「今参ります」。聞き手を敬う。

Q17. 答え：尊敬語（「させ」は使役で、敬語は「たまふ」だけ）

解説：「女房に」と、させる相手があるので「させ」は使役の助動詞「さす」（～させる）。「たまふ」は尊敬の補助動詞で、中宮を敬う。「中宮が女房に御簾を上げさせなさる」。させる相手がなく、主語が帝・中宮などなら「させたまふ」は二重尊敬（最高敬語）になる（Q24）。

Q18. 答え：謙讓語

解説：「奉る」＝「与ふ」の謙讓語（差し上げる）。動作の受け手（馬を受け取る帝）を敬う。

Q19. 答え：謙讓語

解説：「侍り」はここでは本動詞。「宮の御前に」とあるので、貴人のおそばに「お仕えする・お控えする」意の謙讓語で、宮を敬う。「侍り」は丁寧語のことが多いが、本動詞で貴人のそばにいる意なら謙讓語。

Q20. 答え：尊敬語

解説：「思しめす」＝お思いになる。帝を敬う。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21. 答え：謙讓語／受け取り手（差し上げる相手の中宮）への敬意

解説：「奉る」は謙讓。差し上げる相手（中宮）を敬う。

Q22. 答え：謙讓＋尊敬／受け取り手と中宮の両方を敬う

解説：「奉り」＝謙讓、「たまふ」＝尊敬。動作主中宮（尊敬）と受け取り手（謙讓）の、二方面（二方向）への敬意。

Q23. 答え：丁寧語

解説：「侍り」は形容詞「うれし」の連用形に付く丁寧の補助動詞（～です・～ございます）。「とてもうれしゅうございます」。聞き手を敬う。

Q24. 答え：尊敬語（二重敬語）

解説：「出で」（下二段「出づ」の未然形）＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋尊敬の補助動詞「たまふ」＝最高敬語（二重敬語）。させる相手がいないので「させ」は使役ではない。帝に対する敬意。「帝が縁先近くにお出になる」。

Q25. 答え：謙讓語

解説：「仕うまつる」＝お仕えする。

Q26. 答え：尊敬語

解説：「おはします」＝「おはす」の最高敬語化。いらっしゃる。

Q27. 答え：謙讓語

解説：「たまはる」＝いただく。「賜ふ（下二段）」と同系。

Q28. 答え：尊敬語

解説：「仰せらる」＝「仰す」＋尊敬「らる」。おっしゃる。

Q29. 答え：丁寧語

解説：「候ふ」は本動詞だが、主語が「御文」（物）で「あり」の意（ございます）なので丁寧語。会話の聞き手を敬う。「お手紙はここにございます」。人が貴人のおそばに控える意なら謙讓語（Q11）。

Q30. 答え：尊敬語

解説：中宮が女房に与える動作なので、四段の「賜ふ」＝「与ふ」の尊敬語（お与えになる）。中宮を敬う。

Q31. 答え：謙讓＋尊敬

解説：「奉り」＝謙讓、「たまふ」＝尊敬。受け取り手と動作主の両方を敬う。

Q32. 答え：尊敬語（二重敬語）

解説：「せたまふ」最高敬語。

Q33. 答え：謙讓（参り）＋丁寧（侍り）

解説：「参り」＝動作の向かう先を敬う、「侍り」＝聞き手を敬う。

Q34. 答え：尊敬語

解説：「召す」＝お召しになる・お呼びになる。動作主を敬う。

Q35. 答え：謙讓語

解説：「まうづ」＝「行く」の謙讓語（参上する・参詣する）。向かう先（清水寺の仏）を敬う。

Q36. 答え：尊敬語

解説：「御覽ぜ」は「御覽ず」（「見る」の尊敬語）の未然形で、見る人（院）を敬う。「さす」は使役で、「御覽ぜさす」＝院にご覧に入れる（お見せ申し上げる）。「たまふ」などが付かない「さす」は使役。

Q37. 答え：謙讓語

解説：「たてまつる（奉る）」＝「与ふ」の謙讓語（差し上げる）。受け取り手の院を敬う。

Q38. 答え：丁寧語

解説：「侍り」＝ございます。

Q39. 答え：尊敬語

解説：「御覽ず」＝ご覧になる。中宮を敬う。

Q40. 答え：謙讓語

解説：「まゐる」＝参上する。御父を敬う。

Q41. 答え：尊敬語

解説：「おぼす（思す）」＝お思いになる。

Q42. 答え：「さぶらふ」＝謙讓語／「召す」＝尊敬語

解説：「さぶらふ（候ふ）」は本動詞で、「さぶらふ人々」＝（上の）おそばにお仕えしている人々。「あり・仕ふ」の謙讓語で、仕えられている上（帝）を敬う。「召す」は「呼ぶ」の尊敬語（お呼びになる）で、上を敬う。「帝が、おそばにお仕えしている人々をお呼びになる」。

Q43. 答え：謙讓語

解説：「たまはる」＝いただく。

Q44. 答え：尊敬語

解説：「思しめす」＝「思す」よりさらに高い尊敬。帝に対する敬意。

Q45. 答え：謙讓語

解説：「書き」に付く謙讓の補助動詞「まゐらす」（お～申し上げる）。「お書き申し上げる」。手紙を受け取る相手を敬う。本動詞の「まゐらす」は「差し上げる」（「奉る」と同じ意味）。

Q46. 答え：謙讓（候ひ）＋尊敬（たまふ）

解説：「候ふ」＝控える（謙讓）、「たまふ」＝動作主を敬う。

Q47. 答え：謙讓語

解説：「まゐる」＝参上する。

Q48. 答え：尊敬語

解説：「召す」＝「呼ぶ」の尊敬語（お呼びになる）。帝を敬う。傍線部ではない「仰せらる」も尊敬語。

Q49. 答え：謙讓語

解説：「候ふ」は本動詞で、「宮の御前に」（貴人のおそばに）お仕えしている意の謙讓語。話し手から宮への敬意。「宮のおそばにお仕えしているのは誰か」。

Q50. 答え：謙讓語

解説：「まゐらす」＝差し上げる。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

Q51. 答え：「奉り」＝作者から帝への敬意（謙讓）／「たまふ」＝作者から大臣への敬意（尊敬）

解説：地の文の敬語は、すべて作者（語り手）からの敬意。謙讓は動作の受け手（文を受け取る帝）を、尊敬は動作主（大臣）を敬う。「大臣から帝へ」とはしない（敬意を表すのは、地の文なら作者、会話文なら話し手）。

Q52. 答え：「御覧じ」「せたまふ」とともに作者から帝への敬意（尊敬）

解説：地の文の尊敬語は、作者から動作主（帝）への敬意。「御覧ず」＝「見る」の尊敬語（ご覧になる）。「笑ま」（四段「笑む」の未然形）＋「せたまふ」＝二重尊敬（最高敬語）。

Q53. 答え：「侍り」＝話し手から聞き手（高貴な人）への丁寧

解説：会話文の中の丁寧語は聞き手敬意。

Q54. 答え：尊敬語

解説：「聞こしめす」＝「聞く」の尊敬語（お聞きになる）。「思しめす」と同じく敬意の高い語で、帝・中宮などに使う。帝を敬う。

Q55. 答え：尊敬語

解説：「おはします」＝最高位の「いらっしゃる」。

Q56. 答え：尊敬語

解説：「おぼす（思す）」＝「思ふ」の尊敬語（お思いになる）。動作主の宮を敬う。

Q57. 答え：謙讓（さぶらひ）＋尊敬（たまふ）

解説：「さぶらふ」＝控える（謙讓）／「たまふ」＝動作主を敬う。

Q58. 答え：謙讓（申し）＋尊敬（たまふ）

解説：「申す」＝言うの謙讓、「たまふ」＝動作主を敬う。

Q59. 答え：尊敬語

解説：「たまはす」＝「与ふ」の尊敬語（お与えになる）。「たまふ」より敬意が高い。上（帝）を敬う。「帝が人々にほうびをお与えになった」。

Q60. 答え：尊敬語

解説：「仰せ言」＝ご命令、「たまふ」＝尊敬。帝を敬う。

Q61. 答え：「さぶらは」＝話し手から君への謙讓

解説：会話文の中の謙讓語は、話し手から動作の受け手（ここではお仕えする相手の君）への敬意。

Q62. 答え：謙讓語

解説：「たまはる」＝いただく。

Q63. 答え：謙讓（奉り）＋謙讓（申し）＋丁寧（侍り）

解説：3敬語連動。「奉る・申す」謙讓、「侍り」丁寧。

Q64. 答え：尊敬語

解説：「御覧ず」＝「見る」の尊敬語（ご覧になる）。院を敬う。「院が御簾の内からご覧になる」。

Q65. 答え：謙讓（まゐり）＋尊敬（たまへ）

解説：「まゐる」＝参上する（謙讓）、「たまふ」＝中宮を敬う。

Q66. 答え：謙讓（たてまつり）＋尊敬（たまへ）＋尊敬（仰す）

解説：3敬語の連鎖。文脈で読み解く。

Q67. 答え：尊敬語

解説：「御覧ぜ」は「御覧ず」（サ変・「見る」の尊敬語）の未然形で、下に打消「ず」が付く。「帝はこの絵をまだご覧にならない」。帝を敬う。

Q68. 答え：謙譲（さぶらひ）＋丁寧（侍り）

解説：「さぶらふ」謙譲＋「侍り」丁寧。

Q69. 答え：尊敬語

解説：「奉る」はふつう謙譲語（差し上げる）。ここは聞き手が車に乗る動作なので「乗る」の尊敬語（お乗りください）。会話文なので話し手から聞き手への敬意。「申す」は謙譲語で、作者から申し上げる相手への敬意。

Q70. 答え：尊敬語

解説：「たまふ」は四段の尊敬の補助動詞（～なさる）で、見つめる人（動作主）を敬う。「まもる」（じっと見つめる）は敬語ではない。「（その方の）顔をじっと見つめなさる」。

Q71. 答え：謙譲（奉ら）＋尊敬（せたまふ）

解説：「奉る」謙譲、「せたまふ」尊敬（主語が帝・中宮などで、させる相手がいなければ最高敬語。使いに持たせるなら「差し上げさせなさる」）。

Q72. 答え：尊敬語

解説：「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形（四段「驚く」の未然形「驚か」に付く）。下に「たまふ」があり、させる相手もいないので尊敬で、「せたまふ」＝最高敬語。帝を敬う。

Q73. 答え：謙譲（申し）＋尊敬（たまへ）

解説：「申す」謙譲＋「たまふ」尊敬。

Q74. 答え：謙譲語

解説：「奉る」＋「す」（使役）。差し上げさせる。

Q75. 答え：尊敬語

解説：「まゐる」はふつう謙譲語（参上する・差し上げる）。ここは気分の悪い中宮自身が飲まない動作なので「飲む・食ふ」の尊敬語（召し上がる）。「お薬湯さえ召し上がらない」。中宮を敬う。

Q76. 答え：謙譲＋尊敬

解説：「さぶらふ」謙譲（御簾の内の貴人のおそばにお控えする）、「せたまふ」尊敬（させる相手がいなければ最高敬語。人を控えさせるなら「控えさせなさる」）。

Q77. 答え：謙譲（まうす）＋丁寧（侍り）

解説：「まうす（申す）」謙譲、「侍り」丁寧。

Q78. 答え：尊敬語（最高敬語）

解説：「嘆か」（四段「嘆く」の未然形）＋尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」＋尊敬の補助動詞「たまふ」＝最高敬語。院に対する敬意。

Q79. 答え：謙譲語

解説：「たまはる」＝「受く」の謙譲語（いただく）。禄（ほうび）をくださる貴人を敬う。

Q80. 答え：「まゐら」＝話し手（我れ）からお供をする相手（貴人）への謙譲／「申し」＝作者から申し上げる相手（同じ貴人）への謙譲／「侍り」＝作者から読み手への丁寧

解説：会話文の中の敬語は話し手から、地の文（「」の外）の敬語は作者（語り手）からの敬意。謙譲語は動作の受け手（お供をする相手・申し上げる相手）を、丁寧語は聞き手・読み手を敬う。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 答え：謙譲語（絶対敬語）

解説：「奏す」＝帝（天皇）・上皇に申し上げる。受け手が天皇・上皇に限られる絶対敬語。

Q82. 答え：謙讓語（絶対敬語）

解説：「啓す」＝中宮・東宮（皇太子）に申し上げる。絶対敬語。

Q83. 答え：尊敬語（最高敬語）

解説：「ながめ」（下二段「ながむ」の未然形）＋尊敬の助動詞「さす」の連用形「させ」＋「たまふ」＝最高敬語。させる相手がいないので「させ」を使役と取らない。帝への最高敬意。

Q84. 答え：尊敬語

解説：「しろしめす」＝お知りになる。最高敬語。

Q85. 答え：尊敬語

解説：「のたまふ」＝おっしゃる。動作主を敬う。

Q86. 答え：謙讓語

解説：「たてまつる」＝差し上げる。受け取り手の宮を敬う。

Q87. 答え：尊敬語

解説：「おはします」＝いらっしゃる（最高位）。

Q88. 答え：尊敬語

解説：「たまはす」＝お与えになる。動作主を敬う。

Q89. 答え：尊敬語（最高敬語）

解説：「のたまはす」＝「のたまふ」最高敬語化。

Q90. 答え：尊敬語

解説：「思ほす」＝「思ふ」の尊敬語（お思いになる）。最高敬語ではない。

Q91. 答え：謙讓語（絶対敬語）

解説：「けいす（啓す）」＝中宮・東宮に申し上げる（絶対敬語）。ここでは中宮を敬う。

Q92. 答え：尊敬語

解説：「たまふ」は四段の尊敬の補助動詞（～なさる）で、動作主を敬う。「御かしらおろす」＝髪をおろして出家する（「かしらおろす」は敬語ではない）。「出家なさる」。

Q93. 答え：尊敬語（最高敬語）

解説：「わづらは」（四段「わづらふ」＝病気で苦しむ、の未然形）＋尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」＋「たまふ」＝最高敬語。中宮への最高敬意。

Q94. 答え：謙讓（たてまつら）＋尊敬（せたまへ）／申す＝謙讓

解説：3敬語の連鎖。文中の人物関係を整理する必要がある。

Q95. 答え：謙讓（つかうまつり）＋丁寧（侍り）

解説：「つかうまつる（仕うまつる）」＝お仕えする（謙讓）。「侍り」は丁寧の補助動詞（～ております）で、聞き手敬意。

Q96. 答え：尊敬語（最高敬語）

解説：「泣きまどは」（四段「泣きまどふ」の未然形）＋尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」＋「たまふ」＝最高敬語。させる相手がいないので「せ」は尊敬。帝を敬う。

Q97. 答え：尊敬語

解説：「あそばす」＝「遊ぶ（管弦をする）」「す」の尊敬語（お弾きになる・なさる）。中宮を敬う。

Q98. 答え：尊敬語

解説：「しろしめす」＝お知りになる（最高敬語）。

Q99. 答え：丁寧語

解説：「ひかへ」は下二段「ひかふ」（控える・待つ）の連用形で、敬語ではない。それに付く「侍り」は丁寧の補助動詞（～ております）で、聞き手を敬う。Q68「さぶらひ侍り」の「さぶらひ」（謙譲語）と区別する。

Q100. 答え：

- 「御覧じ」＝尊敬（中宮を敬う）
- 「仰せられ」＝尊敬（中宮を敬う、「らる」尊敬）
- 「奉り」＝謙譲（硯を差し上げる相手の中宮を敬う）
- 「まゐらせ」＝謙譲（紙を差し上げる相手の中宮を敬う）
- 「侍り」＝丁寧（聞き手・読み手を敬う）

解説：5つの敬語が一文に。地の文なので、敬意を表しているのはすべて作者（語り手）。「御覧じ」「仰せられ」は動作主の中宮を、「奉り」「まゐらせ」は受け手の中宮を、「侍り」（「こと侍りき」＝ことがございました）は聞き手・読み手を敬う。「御文」「御硯」「御供」の「御」も尊敬の接頭語だが、傍線部ではない。